

あなたに愛や恋は求めません 4

長年俺の命を狙っていた仇敵がいなくなった。先王を唆してゾルガー侯爵家を含む五侯爵家を退け、王に次ぐ権勢を振るつた先代ミューンター侯爵アウグスト。先代ゾルガー侯爵の妻で先王の妹のナディア王女と通じ、ゲオルグを儲けて後継だと偽り、先代と第二夫人、その間に生まれた異母弟らを殺した男は、それを皆の前で自白した。

一方で、俺の命を狙っていた実妹でもあるリシエル王女と、その協力者であるアルトナー侯爵の弟クラウスも捕らえられた。奴らはイルーゼを攫い俺をおびき寄せて殺す気だったが、それもこちらの計画のうち。奴らは捕らえられて今は地下牢で処刑を待っている。ようやく王家とゾルガー家の長く苦しい時代は終わりを迎えた。もともと、俺を狙う者が僅かに減っただけのことだが。

そんな俺の過去をイルーゼに話した。暗殺などに手を染めていた、人に言うには憚られる過去を。拒絶するかと思っていたが、あれは王や養父への怒りを露わにし、それどころか俺を好きだと言ってきた。この流れは予想していなかった。暗殺などという卑劣な行為には嫌悪感を示すものだろうに、どうして好意に繋がるのか理解出来ない。しかも俺の子を産むのは自分だけにしてほしいとまて言う。最初から予想外の行動をする変わった女だと思っていたが、想像以上だった。

だが、悪い気はしない。あれといると面白いと感じることが増えたし、望むことは叶えてもいいと思える。ティオにそう話すと「お気に召されたのですね」と言われた。気に入っているのか……そうかもしれない。以前は側にいることに煩わしきを感じたが、今は気にならない。むしろ長い時間側にいないと何かしかしているのではないかと気になる。寝室でもだ。以前はティオがいるのでさえ気に障ったが、あれだと不思議と不快にならない。いつの間にかいるのが当たり前になっていた。

リシエルらを捕らえた夜更け、王太子に呼ばれた。事後処理のためだろう。ミュンターの爺や王女への尋問が始まるから連絡があると予想はしていたが、夜中に抜け出すとイルーゼを起こしてしまふ。

目が覚めないうらい抱き潰せばいいのだろうか、一騒動あつた後ではそこまで無体な真似も出来ない。それでなくても女は体力がないし、一方で俺は人一倍あるから気を付けるよう、ティオにきつく言われている。となると夜中に出かけるのは避けたい。半日遅れたくらいで困ることはないだろう。明日行くと書いた手紙を使者に渡して寝室に向かった。

「どうしたんだい？ 君が呼び出しに答えなかったなんて初めてじゃないか」

翌朝、王太子を訪ねたら開口一番にそう言われた。

「お陰で大変だったよ。朝の予定を午後や後日に変更したりして」

「自分でやったわけではないだろう」

「そりゃそうだけど……でも、こっちの都合も考えてよ」

「それを言うならこっちの都合を考えろ。夜中に呼び出すな。俺も暇ではない」

そう反論すると、目を丸くして「ごめん」と謝られた。夜中なら問題ないと思っていたのだろうな。だが、こちらはその分睡眠時間を削っていた。王族より融通が利くからと大目に見ていたからだ。

「すまなかつた。確かにそうだよ。イルーゼちゃんとの時間を邪魔しちゃ悪いよね」

「ちゃん付けで呼ぶな」

「ええ？ なんで今になって……」

「本人が嫌がつている」

「イルーゼちゃんが……」

何故ショックを受けている？ 普通に嫌だろう？

「お前は他の女もちゃん付けで呼んでいるのか？」

「いや、さすがにそれは……」

「だったら何故イルーゼにはそうする？」

年下とはいえ成人している女をそう呼ぶのは不適切だろう。

「それは、だつて……お義姉様だし……」

「だったら尚更やめる。姉なら立場は上だ。それともお前をそう呼ぶか？」

「え？ いいの？」

目を輝かせた。何故そこで喜ぶ？

「お兄様なら大歓迎だよ。イムレちゃん、うん、いい！ 今度からそう呼んでよ！」
自分で言っていて喜んでいるが……こいつは頭がおかしいのか？

「断る」

三十を超えた男が子どものような真似を喜ぶなど気が知れん。

「ええ〜なんだだよ……」

「気持ち悪い」

「お兄様、酷い……」

こいつを喜ばせることはしたくない。調子に乗ると面倒くさいし鬱陶しい。馴れ馴れしいのも弟なら仕方がないと思っっているが、いい大人なのだ。そろそろ弁えろ。

「それで用件はなんだ？ 早く話せ」

「うっ……睨まないでよ」

こいつの雑談に付き合っていると終わるものも終わらない。急かすと怯んだが、別に睨んでなどいない。目つきが悪いのは生まれつきだ。

「やらねばならないことがある。早く終わらせろ」

「ああ、結婚してからお兄様は一層冷たくなった……イルーゼお義姉様、愛されているなあ……」
「俺たちの間にそんなものは存在しない」

そう言うとますます目を大きく見開いた。口まで開いているぞ。みつともない。

「な、何言っているの？ 愛がないって……あんなに仲良さそうに見えるのに」

「イルーゼを妻として世間並みに扱えと言われた。俺が蔑ろにすれば侮られると」

「言われたって、誰に？」

「使用人だ」

妻を蔑ろにすれば叛意を持たれて家の中に敵を作りかねない。それでは結束が緩んで危険だときつく言われたからそうしているだけだ。あれもそう望み文句を口にすることもないし、使用人からの評判もいい。妻としては申し分ない。

「な、んだよそれ……いや、それにしたって、あの子が好きだから出来ることだろうか？」

「好き？ 俺が？」

「そうだろうか？ 君、他人には徹底的に無関心じゃないか。あの子だけだよ、気遣っているの。自覚ないの？」

「ないな」

そんな風に見えるのか？ ティオたちが言う通りにしているだけだ。それにあれは面倒なことを求めてこない。

「うわ、無自覚だったんだ……まあ、君らしいけどね」

俺らしいとはどういう意味だ？ こいつは俺の過去を何も知らない。そんな風に言えるほど俺を理解しているわけではないだろう。

「でも、よかったよ。君にも人並みに感情があったんだね」

よくわからないな、俺の感情……確かに感情はあるのだろう。こいつを面倒だと思うのも、こいつよりもイルーゼといった方が楽だと感じるのもそうだ。そういうばイルーゼは感情がよく動くな。まさか俺のことで怒り出すとは思わなかったが……

「どうしたの？ 黙り込んじゃって」

「……いや、イルーゼが怒った時のことを思い出していた」

「ええ？ 君、怒らせたの？ 何したんだよ？」

「どうして俺が怒らせたと決めつける？」

「俺にではない。王や養父にだ」

「それって……父上とオスカー殿？」

「ああ。俺の扱いが酷すぎると。感情を失うほどの目に遭わせたのに何もしなかったと怒っていた。それを俺がなんとも思わないことも嫌がっているように見えた」

「何故他人のことであんなにも感情を荒らげたのかわからない。感情を大きく揺らした奴はうるさくて不快だ。だが俺のことでそうなるあれを見るのは……悪くない、かもしれない。」

「それは父上が……いや、俺もだな。すまない」

「何故お前が謝る？」

「え？ だって……兄上が苦勞している時、俺は安穩と暮らしていたから。もしかしたらそうになっていたのは俺だったかもしれないのに……」

なるほど、双子だから逆だった可能性もあるか。だが今更だ。

「お前のせいではない。だがお前がのうのと暮らしていたのは確かだな」

「う……！ そ、そうだよね……ごめん」

「悪いと思うなら死ぬ気で働いて俺の負担を減らせ」

「ええっ？」

俺はお前や王家にばかり構っていられない。ミュンターの爺もお荷物の王女もいなくなった。王家の負担は減らしてやったのだからその分働け。

「今まで散々無理を聞いてきたがこれからは自分でなんとかしろ」

「いや、でも……」

「俺は忙しい」

「……善処します」

期待出来ないが、些細なことなら突っぱねて自分でやらせるか。いつまでも王家の尻拭いなど御免だ。ミュンターの爺がいなくなり先王の影響力は消えた。先王の血縁で残るのは側妃が産んだシリングス公爵とその子のハリマンだが、奴らにはそんな力も覇気もない。放っておいても問題ないだろう。

「ミュンターの爺らはどうしている？」

「ああ、今朝から本格的に尋問を始めているはずだよ。まあ、大人しく白状するとは思わないけど」

「だろうな」

だが白剤を使えば口も滑らかになるだろう。爺は警戒するだろうが飲ませる方法はいくらでも

ある。

「ここで一気に膿を出せれば掃除も進むよ。ところで、フレデイはどうするの?」

「どうもしないが?」

「だけど、ミュンターの爺さんの孫だろう? 気にならない?」

確かにあの爺の孫だが、フレデイはあの男を疎んじている。真実を知ったところで情が湧くこともないだろう。

「血筋など我が家には関係ない」

「そっか。フレデイはいい叔父を持ったね」

フレデイはゾルガーの子として育った。今更他で生きていけるとも思わないし、俺もあれの助けが必要だ。あれが領地経営を手伝ってくれなければイルーゼとの時間が取れない。

「もう話は済んだな。帰る」

「え? ちょ……まだ来たばかりじゃないか」

「用は済んだ。俺は忙しい」

これ以上話すことはないし、用もない。片付けねばならない仕事が屋敷で待っている。後ろで何か言っていたが無視して王宮を後にした。

屋敷に戻るとイルーゼとティオが迎えに出てきた。イルーゼは一層機嫌がいいように見える。ティオもだ。何かあったか?

執務室に向かいながらコートを脱ぐとイルーゼが手を出すので渡してやった。嬉しそうに俺のコートを抱きしめている。それが気に入ったのかと尋ねると大きいですねと笑顔を見せた。俺のだから大きいだろう。何を喜んでいる? 留守にしている間に変わったことはないかと尋ねると、特にはないという。

「どういうことだ? 何故あんなに嬉しそうにしている?」

イルーゼが家政の仕事に向かった後、部屋に残ったティオにイルーゼの行動について尋ねた。

「きつと旦那様のお言葉を嬉しく思われたのでしょうか」

「俺の?」

「奥様に、他の女性には触れないと仰ったとか?」

「ああ、あれがそう望んだ。妻の望みは出来るだけ叶えるものなのだろう?」

そう言ったのはティオだ。俺は愛することが出来ないから、それ以外のことで埋め合わせをするしかない。

「左様でございます。だからお喜びなのでしょう。妻を放置して愛人をあちこちに作る貴族も少なくありません。ご自分だけというのは女性にとって、我々男が考える以上に嬉しいことなのでしょう」

なるほど、浮気は男の嗜み、浮気を責めるのは妻として狭量だとも言われている。イルーゼは貞操観念が強そうだから浮気する男は嫌いだろう。だが愛を知らない男のどこがいいのか。ついでにコートに喜ぶのも理解出来ない。

「わからんな」

「わからなくても、それでよろしいではありませんか？」

「いいのか？」

「ええ。奥様はお幸せそうですし、旦那様も不満はございませんでしょう？」

「……そうだな」

確かに不満はないな。それに上機嫌なのはいい傾向だ。主の不機嫌は使用人を萎縮させ不満を生み出す。それでは屋敷内に敵を作り危険だ。俺は未だに改善出来ずにいるが、ティオたちのお陰で無表情でも不機嫌ではないと理解してくれている。イルーゼは表情がよく変わるが機嫌よくいてくれた方がいい。

「そういえば、フレディ様がお会いしたいと仰っていましたよ」

「フレディが？ そうか、呼んでくれ」

ティオが入口に控える護衛の一人にその旨を告げると、すぐに姿を消した。程なくしてフレディが姿を現した。

「どうした？」

俺とは似ていないが似た色彩を持つ甥は、僅かに緊張しているように見える。声をかけると「仕事中にすみません」と謝りながら机の前まで進み、重厚なそれの上に手にしていた紙の束を置いた。「叔父上、領地で新しく事業を始めたいのです。アベルたちにも手伝ってもらって計画書を作りました。是非ご検討を」

最近忙しそうにしていたのは事業を立ち上げる計画を立てていたからか。好きにやってみると言ったが思ったよりも早かったな。やる気があるのはいいことだ。差し出された書類を手にとって目を通す。何を始めるのかと思ったら……薬草の栽培か。需要は無限にありそうだが、これは……「俺の両親が亡くなる原因になった流行り病に効くという薬草です。隣国では民にも広がっているのですが、我が国ではまだまだ数が少なく入手が困難です。調べてみたところ山の上の方なら栽培が可能ではないかと。一度苗を手に入れて植えてみて、育つようなら広げたいと思います」

なるほど、ゲオルグたちが罹った流行り病か。貴族なら金さえ積めば薬が手に入って助かっただろうが、流通する絶対数が少なすぎるから平民ではどう足掻いても手に入らない。もし成功すれば病による死者も減るし領地も潤うだろう。山間部は農業に適さず、収入に結びつく産業が少なく貧しい。やってみる価値はあるか。

「わかった。苗を手に入れるよう言っておく。それまでに植える場所を厳選しておけ。場所や条件を変えて育ち具合をよく見るんだ。最もよく育った場所から広げていけ」

「はー」

目を輝かせて嬉しそうな表情を浮かべたが、すぐに表情を固くした。どうした？

「叔父上、その……」

「なんだ？」

「……お、俺は……ここにいる、いいのでしょうか？」

両手を握り俺よりも薄い緑目を揺らした。何を言い出すかと思えば……真実を知ったか？ いや、

それはないな。知る者は少なく、口外しないようきつく言い聞かせてある。

「何も問題はない。何か言われたか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

それだけを言うとは俯いてしまった。無責任な噂を耳にしたか。

「お前はゾルガーだ」

「ですが……」

「それを言ったら俺こそ部外者だ。ゾルガーの血を引いていないからな」

「でも、それは祖父と陛下がお認めになったからです」

「だったらお前も同じだ。俺と王が認めている。それ以上に何か必要か？」

確かにフレディはゾルガーの血を引いていないが、そんなことは問題ではない。ゾルガーとして育ったのなら資格は十分にある。それに……

「お前がいけないとこの家が回らん。お前はここの家の要だ。かなめつまりらぬことを気にしている暇などないぞ」

そう言うとパッと顔を上げた。まだ納得いかないか。

「ゾルガーの二代目は養子で、血などどつくに途絶えている。大事なものは実力だ。力を付けて俺の代わりに領地を治められるようになればいい」

「領地を……」

「俺が領地経営を学び始めたのは十四になつてから、実務を始めたのは二十二からだ。お前は俺よ

りも早く長く学び、実務を始めたのも早い。足りないのは経験だけだ。何も問題ない」

フレディは十の時から領地経営を学び始め、それに付随する知識も十二分にある。経験はこれから積み重ねていけばいい。

「わからなければ周りの者に聞けばいい。俺はそうしてきた。何も恥ずべきことではない」

「は、はい」

顔つきが明るくなった。これが普通の反応なのだろうな。俺は言われた通りにするだけで悩むことはなかった。何も感じない方が気が楽なのかもしれない。

「ありがとうございます、叔父上」

「礼を言うのは俺の方だ。仕事が減った分、他のことにも手が回るようになった」

フレディがいなければイルーゼの相手も出来なかった。あれの顔が浮かんたところで扉が叩かれた。ティオが扉を開くとそこにいたのは本人だった。

「旦那様、奥様が……」

「どうした？」

仕事は片付いたのか？ ティオが扉を支え、その横からイルーゼが入ってきた。

「あ、お話中でしたか？」

「いや、終わつたところだ」

そう言うとはっと表情を緩めた。そういえばそろそろ茶の時間か。

「ティオ、王太子に貰った菓子を出してやれ」

「え？ 殿下から？」

「ああ、王都で流行りの菓子らしい。フレディも食べるだろう？」

二人とも甘いものを好む。ソファに移動しようと立ち上がったがフレディは動かない。視線を向けるとなんとも微妙な表情をしている。なんだ？

「いえ、俺はこれで失礼します。イルーゼ嬢、叔父上を頼みます」

「え？ フレディ様？」

フレディは書類を手にするとさっさと出て行ってしまった。イルーゼが怪訝な表情で扉の方を見ている。

「フレディ様、どうなさったのかしら？」

「お二人の邪魔をしたくないと思われたのでしょうか？」

「邪魔？」

不思議そうに呟いたイルーゼはティオの答えにますます困惑していた。俺もティオに尋ねたが笑みを深めるだけだった。



陛下の即位十五周年を祝う式典から半月が過ぎた。ヴォルフ様に好きだと告げてしまったことで何が変わってしまうかもしれないと不安になったけれど、ヴォルフ様の態度にも私たちの関係にも

これといった変化はなかった。暫くは気を揉みただけれど、何も仰らないからこれでいいと思うことにしたわ。私以外の女性に触れないと約束してください、それで十分。あの言葉を思い出すだけで頬が緩んでしまうのは許してほしい。

寝る準備を終えて寝室で寛いでいると、湯あみを終えたばかりのヴォルフ様がやってきた。ろうそくの灯りが黒髪とそこから落ちる雫を照らす。まだ拭き足りていないわ、ご自身のことには無頓着なのよね。立ち上がって肩にかかったタオルに手を伸ばすと、察してくれたヴォルフ様がソファに腰を下ろした。後ろに回って髪を拭く。それだけのことだけど夫婦つぼくてくすぐったい気分になるわ。

「王女とクラウスは近々毒杯だそうだ」

投げられた言葉は甘さの欠片もない物騒なものだった。

「早かったですね」

「決まっていたことだ。逃げられる前にと考えたのだろう」

実妹相手でもヴォルフ様に感傷のようなものは見られなかった。過酷な幼少期を送ったヴォルフ様。王太子殿下やブレッケル公爵、リシエル様が弟妹だと知った時、どう思われたのかしら。きつという感情ではなかったような気がする。いえ、何も感じなかったのかもしれないけれど。

「ミュンターの前当主は？ まだかかりそうですの？」

「奴の取り調べは始まったばかりだ。時間がかかるだろう」

容疑は多いけれど、物証が乏しく難儀しているという。証拠は徹底して消していたのでしょうかね。

メリア様とそのお子の殺害の告白だけでも処刑は確実だけど、出来る限り明らかにしたいわよね。
「死は免れんが王も頭を痛めている。五侯爵家の二家がこの有様ではな」

「そう、ですわね」

五侯爵家から罪人が出たなんて頭が痛いわよね。片方は前当主だし、もう一人は現当主の実弟。特にミュンターは罪の数も重さも膨大だから、爵位返上と領地没収もあり得るかもしれない。クラウス様は独立しているからアルトナーはミュンターほどの罰は科せられないとは思うけれど、全くお咎めなしとはいかないわよね。

五侯爵家は配下の家門を監視し、指導する役割も担っている。その力が弱まれば国が乱れる元になりかねず、そうなるとうオルフ様の負担が増えてしまう。それは困るわ、やつとアウグスト翁が退場して楽になると思っていたのに……髪を拭き終えたので隣に腰を下ろした。

「ヴォルフ様はどうお考えですか？」

一番の当事者はヴォルフ様だから、そのお考えを陛下は判断材料にされるわよね。どうなさるかつもりなのかしら？

「ヴォルフ様？」

いつもならすぐに答えが返ってくるのに沈黙が流れた。不審に思っ顔を覗き込むと、目をきつく閉じ眉間の皺が今までにないほどに濃い影を作っていた。一気に心が冷える。

「ヴォルフ様？ どうなさいましたの？」

体調が優れないのかしら？ 手を取って驚いた。

「ヴォルフ様！ ね、熱が!?」

いつも私のそれよりも温かいけれど、今日は熱すぎるわ。額に手を当てると、物凄く熱い……!!
「ヴォルフ様、しっかりなさってください！ ティオ!! 誰か来てっ!!」

この寝室は敏感なヴォルフ様に合わせて音が伝わらないようになっていて、必死に声を張り上げた。人を呼ぶために立ち上がるうとしたら腕を取られて、そのままソファに押し倒されてしまった。

「ヴォ、ヴォルフ様っ!?」

押し倒されたんじゃないやなくて倒れてきたヴォルフ様の下敷きになっていた。抜け出したいけれどヴォルフ様の身体は大きくて重くて、しかも何故か抱き込まれていて動けない。医師を呼びたいのに……!! 藻掻けば藻掻くほど拘束がきつくなっていく気がした。

「奥様、どうかされましたか？ 声が……」

扉が開いて隙間からティオが顔を覗かせた。天の助けだわ!

「ティオ！ お医者様を呼んで！ ヴォルフ様が熱を出しているの!」

「旦那様が!?」

ティオが手にしていた酒瓶とグラスの載ったトレイをテーブルに置いて、ヴォルフ様に駆け寄り寄った。お願いだからヴォルフ様を……いえ、それよりも医師を呼ぶのが先かしら。

「旦那様、大丈夫でございますか？」

ティオがヴォルフ様の身体を起こそうとした瞬間、ヴォルフ様の腕がティオを払うように動いた。

ティオはそれを腕で受けて後ろに跳ねる。な、何が起きたの？

「……私では無理のようですね。人を呼んで参ります」

「……え、ええ。それにお医者様もお願ひ」

「かしこまりました」

そのままティオは寝室から出ていった。ヴォルフ様のあの動き、まさかティオを攻撃したの？ 敵だと思つて？ 伝わってくる常にならない熱と意識のなさに一層不安が増す。暫くすると複数の靴音が近付いてきた。

「ヴォルフ、熱が出たんだって？」

駆けつけたのはティオとブレン、そして知らない男性だった。暗いしヴォルフ様が上にいるせいではつきり見えないけれど、ヴォルフ様より少し年上かしら。男性が近付くとヴォルフ様は再び男性の手をきつく払った。

「ああ、こりゃあ無意識に守りに入っているな。おい、ヴォルフ！ 嫁さんを放せ！ 絞め殺す気か！」

ヴォルフ様へ気安げに話しかけた彼をティオもブレンも窘めなかつた。こんな言葉遣いをヴォルフ様にする人は初めてだわ。そんなに親しいの？ 男性が再びヴォルフ様に触れようとすると、また腕が動いたけれど、男性は難なくそれを受け止めた。

「ああ、落ち着けて！ 嫁は無事だ。ほら、ベッドに行くぞ！ 聞こえてるか!?」

子どもを相手にするように大きな声でヴォルフ様に話しかける。暫くすると拘束する力が緩んで

ようやく脱出出来た。そのまま男性とブレンが二人がかりでヴォルフ様をベッドに運び、入れ替わるようにザーラが水を張ったらしいとタオルを持ってきてくれた。タオルを濡らして額を冷やしたけれど、すぐに温まってしまう。

「ヴォルフ様、どこか痛いところはありますか？」

顔を近づけて呼びかけても、荒い息遣いが返ってくるだけだった。意識がないなんて……いつから熱があつたの？ 今日はいつも通りに執務をしていらつしたわよね。そういえば夕食の進みがいつもよりも遅かつたかもしれない。妻なのに夫の体調の変化に気付けなかつたなんて……情けないわ。

程なくして医師のルーザーと助手のロータルが来てくれた。ティオと共に少し離れた場所から診察を見守った。

「ティオ、今日のヴォルフ様の様子はどうだった？ 夕食が……いつもよりも進みが遅い気がしたけれど……」

「申し訳ございません、奥様。午後から表情が険しく見えましたのでお尋ねしたのですが……」

「問題ないと仰つたのね」

ティオが頷いた。予想通りだわ、きっと誰が尋ねても同じように答えた気がする。暫くすると診察を終えたルーザーとロータルがこちらにやってきた。

「ヴォルフ様は……」

「発疹などは見られませんが、僅かですが喉が赤くなっているようです。流行り病の話も聞きませ

んので多分風邪かと。明日の朝、明るくなってからもう一度診察いたします。それまでは熱冷ましを飲んでいただきますよう」

ロータルが詳しく説明してくれたけれど、朝を待つしかないわね。仕方がないわ、ろうそくの灯りではよく見えないもの。

それからはヴォルフ様の枕元で一夜を過ごした。暗闇は余計に不安を煽るものだと思ひ知らされた夜だった。攫われたあの夜よりも今の方がずっと怖く感じるのはヴォルフ様が目を覚まさないせいね。誰よりも強くて何があっても揺るがないと信じ切っていたから、こんな状況を想像したこともなかった。たらいの水がすぐに温くなってしまふ。

「ティオ、ヴォルフ様がこんな風に熱を出されたことは？」

「……私の知る限りでは、一度も」

その答えは私を安心させてくれるものではなかった。風邪で意識がなくなるほどの熱なんて出るものなの？ まさか毒？ でも、今日は外出していらつしやらないし、ヴォルフ様が口にされるものは全て毒見済みのはず。

「奥様、あまりお気に病みませんように。旦那様とて人間です。時には風邪をひくこともございましょう」

ティオが声を明るくしてそう言った。

「そうね。私が悲観してもどうしようもないわね」

一緒に心配してくれる人がいるのが心強い。きっとお疲れなのよ、あんなことがあったばかりだから。

から。

「そういえば、さつきは大丈夫だった？ 怪我は？」

「心配ご無用です。一応鍛えておりますので」

さつきのヴォルフ様にも驚いたけれど、ティオの反応もよ。あんなに俊敏に動けるとは思わなかった。それにしても……

「どうされたのかしら？ ティオを攻撃しようとしたように見えたけれど……」

信頼しているティオに敵意を向けるなんて、信じられない。

「旦那様は影に身を置いていたこともございます。その名残でしょう」

「そ、そうなの？ じゃ……」

私も危険なのかしら？ いつも一緒に眠っているけれど……

「奥様は大丈夫でございます。先ほどは奥様をお守りしようと無意識に反応されたのでしよう」

「そ、そうかしら……」

そんな風には感じなかったけれど……大丈夫、なの？ ヴォルフ様に襲われたら私なんてあつという間だけ……

夜が明けてもヴォルフ様は目を覚まさなかった。ティオと相談して、ヴォルフ様を明るい私の寝室に移動することにした。護衛騎士たちに担架で運んでもらったけれど、念のためにとティオは眠り薬を飲ませていた。そんなに危険なの？



その後ルーザーとロータルに再度診察してもらったけれど、結果は昨夜と変わりなかった。外は明るくなったのに私の心は暗いまま。

ヴォルフ様が目を覚ましたのはそれから二刻ほど経った頃だった。

「……ル……ぜ？」

「ヴォルフ様！ お気付きになりました？」

「あ、ああ……俺は……」

「熱が出たのですわ。それからずっと目を覚まされなくて……ようございました……」

まだぼんやりしているように見えるけれど、視線は私を捉えてくれた。緑玉の瞳に自分が映っているのが嬉しい。

「そうか……心配をかけたな」

起き上がろうとしたので慌てて止めた。まだ熱が完全に下がっていないから無理は禁物だわ。頭と喉と関節に痛みがあるものの、内臓などに違和感はないという。ルーザーたちを呼んで再度診てもらおう。熱は下がっているけれど、薬の効果が切れればまた上がるだろうと言われた。

「風邪でございましょう。四、五日はゆっくりお休みください」

「だが仕事が……」

「風邪は万病の元、風邪程度などと言って侮りませぬよう。オスカー様も最初のきつかけは風邪だったのをお忘れですか」

「……わかった」

ルーザーの珍しく強い口調にヴォルフ様が勢い負けしていた。若い人でも風邪をこじらせて亡くなることもあるわ。ヴォルフ様は働きすぎだから、これを機にしつかり休んでいただきたい。

「奥様、仕事の割り振りをフレディ様と相談して参ります」

「あら、私も行くわ。家政のこともあるし」

「テイオ、俺が行く」

「いいえ、旦那様はそのままお休みになっていてください。奥様は旦那様のお側に。抜け出さないように見張りをお願いいたします」

テイオが一礼して部屋を出ていった。確かに放っておいたらヴォルフ様は起き上がったって仕事を始めてしまいそうよね。ヴォルフ様の方を向いたら目が合ったわ。なんだか面映ゆい……

「さ、ヴォルフ様、横になっていてください。お腹は空きませんか？ スープなどいかがでしょう？」

顔に集まった熱を誤魔化すように話しかけた。

「……そうだな、食べねば身が持たんな」

それなら熱が下がっている今のうちね。ロツテに頼んでスープを持ってきてもらった。野菜と肉を柔らかく煮込んだスープを飲んだ後、ヴォルフ様は再び眠りについた。食事が出来るなら大丈夫かしら？ 安堵したのも束の間、しばらくするとまた熱が上がってしまった。

その日のうちにヴォルフ様は私の寝室から少し離れた客間に移動された。ご自身の寝室は暗くて診察に向かないけれど、私の寝室は窓が大きくバルコニーも付いているから落ち着かないらしい。

私はヴォルフ様の側でお世話をして殆どの時間を過ごした。同じ空間でこんなに長く過ごしたのは婚姻以来だわ。こんな時なのにずっと一緒にいられるのが嬉しい。フレディ様も仕事の確認と一言ながら頻繁に様子を見に来ていた。

「イルーゼ嬢、叔父上は？」

「葉が切れると熱が上がりますが食事もされていますし、ルーザーも大丈夫だろうと」

「そうか、よかった……今まで叔父上が寝込んだことなどなかったから……」

フレディ様が強張らせていた表情を緩めた。彼がいてくれてよかったわ、私では領地のことは何も出来なかったもの。

「もしかして私が負担を増やしているのかしら……」

「奥様、そのようなことはございません」

テイオに断言されたけれど、私はザーラたちほど強くないのよね。

「どうしたらもっと強くなれるのかしら……」

「奥様に求められているのはそういうことではございません。負担を減らしたいとお思いなら無謀なことはお控えください」

「……わかったわ」

皿おどりになったことをまだ怒っているのね。いえ、テイオが怒るのも当然なのけど……鍛錬は続けているけれど、足手纏あしでまといから脱却するのはまだまだ先になりそう。せめて家政だけでも足を引つ張らないようにしたいわ。

四日目にはヴォルフ様の熱も微熱程度にまで下がり、皆が胸を撫で下ろした。やはりヴォルフ様は慕われているのね。フレディ様をはじめとして、ブレンやアベルたちが率先して仕事を肩代わりしてくれたから混乱もなかったわ。さすがというべきか、統制が取れている。実家はいつもバナナが父に振り回されて苦勞していたから、その差を一層鮮明に感じるわ。

その日の午後、思いがけない来客があった。銀の髪を茶のかつらで隠して現れたのは王太子殿下だった。まさか来るとは思わなかったわ。さすがのテイオも一瞬声を失っていたけれどさすがはゾルガー家の家令、万事卒なく対応してくれた。

「何をしに来た？」

「いや、寝込んだって聞いたから……」

「ただの風邪だ。いちいち騒ぐな」

ヴォルフ様の態度は冷たくて、早く帰れと言わんばかりだった。王太子つて意外と暇なのかしら。報告があつて。リシエルがね」

「そうか」

お二人がリシエル様について語ったのはそれだけだったけれど、毒杯を賜ったのだとわかった。いろんな思いが胸に浮かんでは消えていく。好意は持てなかったけれど、亡くなったと聞いて嬉しとかよかったとは思えなかった。残ったのは、狙われることがなくなったという苦い安堵だけ。

それから日を置かずにクラウド様もその後を追ったけれど、姉の人生を狂わせたあの人にはなん

の感慨もなかった。



それから更に一月余りが過ぎた。親友のリーゼ様の婚姻式が開かれ、私はヴォルフ様と共にアウラー伯爵邸を訪れていた。商会を持つ新郎新婦の実家は裕福で、伯爵家とは思えないほどの贅を尽くした式だったわ。

「ゾルガー侯爵様、イルーゼ様、来てくださってありがとうございます」

隣国から取り寄せたシャイル織という絹を使ったドレスに身を包むリーゼ様は、普段の落ち着いた装いからは想像出来ないほど艶やかだった。独特の光沢を放つドレスはこれから流行りそうね。宝飾品も細かい細工が目を惹くけれど、自信に満ちた花嫁の笑顔の前には霞んでいるわ。

「おめでとうございます、リーゼ様。素晴らしいですね、小物一つ一つも意趣を凝らしたもので、見ているだけで楽しいわ」

「ふふっ、今日は売り出したいと思っていた商品をふんだんに使っておりますの。ね、ローレンツ様」

お祝いの言葉よりも商品に言及した時の笑顔の方が輝いているわ。愛よりも同志的な繋がりが強い親友のようなお二人。挨拶に忙しいリーゼ様とは後日お茶会の約束をして離れた。

「エルマ様、バルドリック様も、ご機嫌よう」

見知った顔を見つけて話しかけた。仲睦まじそうに見えるけれど、あれからお二人の関係はどうなったのかしら？ 先日開いたリーゼ様独身最後のお茶会では、以前話題になったあの閨むねに関する本をいただいたのよね。エルマ様は実践されたのかしら？ 気になるわ。

お二人の挨拶にヴォルフ様は鷹揚おつように頷くと、少し話をしてくると言って離れ、バルドリック様もご友人のもとに向かわれた。私たちに気を遣ってくださいましたのね。

「リーゼ様の趣味で固めたパーティーですわね」

「ええ、他国の品も並んで……これはもう展示会ですわ」

苦笑しながらエルマ様が辺りを見回した。物珍しい品が並んでいて、招待客の目は新郎新婦よりもそちらに向いているわ。新郎新婦の思惑通りね。

「そういえば、ミュンターの前当主は……」

「ええ、十日前に」

祝いの場で大つぶらに話すことではないので距離を詰めて声を潜ひそめた。ミュンターの前当主アウグスト翁は先日ひっそりと処刑された。毒杯でなかったのは罪が重すぎて処刑が妥当だとの声が多かったことと、貴族家への牽制けんせいの意味合いもあった。王家を利用する者、私欲に駆られて道を踏み外した者は、たとえ当主を務めた者でも極刑に処すとの王家の強い意志が込められていた。

「随分抵抗なさったそうですわね」

「ええ、最後まで往生際が悪かったとか」

最後は自白剤の中毒になりかかっていたという。それでも抵抗の意思があったのだから相当強韌

な神経の持ち主だったのでしようね。

「ミュンター家は王太子殿下の第二王子が継がれるそうです。成人なさるまではブレッケル公爵が中継ぎをされるとか」

「苦肉の策ですわね」

エルマ様が苦笑した。王太子妃殿下はアウグスト翁の姪だから王子殿下にもミュンターの血が流れているけれど、殿下はまだ八歳。成人するまでは王家が派遣した文官たちが領地を治め、当主代行としてブレッケル公爵が家門の貴族家をまとめる。

「大変ですわね、ブレッケル公爵様も……」

「ええ、いきなり五侯爵家、しかも問題を起こした家ですから」

ヴォルフ様がゾルガー家を立て直した時と同じか、それ以上に大変な気がするわ。ミュンターの下にいる家をまとめ、彼らを導かなければならない。他の侯爵家を格上げする話もあったけれど一週間経っても話し合いがまとまらず、意見を求められたヴォルフ様がブレッケル公爵の中継ぎと第二王子のミュンター次期当主案を提案したところ、ようやく折り合いがついたとか。

ミュンターの現当主は早々に爵位と領地の返上を申し出て、一家は貴族籍はく奪の上、領地で生涯幽閉と決まった。放逐しなかったのは復讐に走ったり利用されたりさせないため。アルビーナ様はハリマン様と婚約出来たと喜んでいただけに残念でならない。彼女はアウグスト翁の罪には関わっていないかったのに。

アルトナー侯爵もその地位の返上を願い出たけれど、当主は何も知らなかったこと、クラウド

様は既に独立して籍を抜けていたことから不問になった。それでも当主として弟の監視を怠ったと、金の鉱山の権利を自ら王家に譲渡した。アルトナーを潤してきた金鉱山の喪失はかなりの損失になり、これまでの権勢を保つのは容易ではないだろうと囁かれている。

「後味の悪い結果になりましたわね」

「ええ。暫く荒れそうですわね」

エルマ様がぼつりと呟いた。要である主家が弱まれば、家門の中からつまらないことを考える者が出てくる可能性もある。ブレッケル公爵は陛下のお子だけれど、家門の者達が素直に従うかは別問題。ヴォルフ様のように有無を言わせぬ実力があれば、家門の者達が素直に従うかは別から侮られるかもしれない。膿は出たものの傷口が塞がるまでには時間がかかりそうね。しかも古傷だから綺麗に元通りとはいかないでしょうし。

「そういえば、フィリーネ様はお元氣ですか？」

急に出てきた名前に苦い笑みが浮かんだ。

「元氣ですわ。今は母の実家に」

「お母様の……そういえば、ご両親は離婚なさったのでしたわね」

「ええ」

兄の病で保留になっていた両親の離婚は正式に成立した。父が異議を申し立てなかったのですんなり通ったわ。母は祖父母のもとに向かい、姉も子をアルトナー家に渡した後、母の跡を追った。

その直前に姉の出自やクラウス様のその後を話したけれど、意外にも姉は冷静だった。クラウス

様の最期よりも、実母が母を裏切つて相愛の婚約者を奪ったことにショックを受けているように見えた。そんな姉からは子への愛情は感じられず、使用人の話では、授乳も最初だけで殆どを乳母や使用人に任せていたという。姉には子がいないアルトナーの分家が引き取るとだけ伝え、嫡男として育てることは伏せてある。見送りに行つたけれど姉は黙って馬車に乗り込み、何を考えているのか最後までわからなかった。

その姉がいた別邸には今、カリーナが入つて出産を待っている。彼女も出産後は母のもとに向かうとか。気が付けば実家はバラバラになつていた。一年前までは私以外は仲が良いように見えただけに、その変わりようが信じられない。

「これはこれは、今を時めくゾルガー侯爵夫人とベルトラム侯爵家の若夫人ではありませんか。二人とも実にお美しい！」

しんみりした気分のところ、不躰な声が割り込んできた。声をかけてきたのは少し年上の茶の髪をした整った顔立ちの若い男性で、その傍らには友人らしい男性二人。軽い口調がどうにも癪に障るわ。

「マイネ伯爵令息、私はともかく侯爵夫人に話しかけるなどマナー違反ですわよ」

エルマ様がピシャリと釘を刺した。この方、ベルトラムの一門でバルドリック様のいとこね。

「固いなあ、エルマは。俺たちの仲じゃないか」

「あなたに名前呼びを許すほど仲がよかつた事実はありません」

「うわ、きついなあ。でもそういうところだぞ、エルマ。もっと可愛げを持たないと。ねえ、そう

思われませんか、ゾルガー夫人？」

随分気安く話しかけてくるわね。不快だわ。でもバルドリック様のいところなら無下にすることも憚られる。

「エルマ様は十分にお可愛らしくていらつしやいますわ。バルドリック様はよくご存じのようですね。」

「な……」

「エルマ様も興味のない方から好意を持たれても困りますでしょう。私も同感ですわ。夫以外の殿方からの好意はトラブルの種、ご遠慮したいですわね」

口元を扇で隠して視線を外し、話を続ける気がないと暗に示す。実際バルドリック様はエルマ様に夢中だし、エルマ様は他の方の好意など欲していないわ。

「真面目でいらつしやるのですね。ですが……五侯爵家の夫人ともなれば幅広い人脈が必要です。男女問わず、ね」

恥をかかせないようにとの気遣いは不発に終わり、最後の一言をやけに強調して流し目を送ってきた。気持ち悪いわ。そして随分とご自身に自信をお持ちなのね。ありふれた茶の髪はともかく瞳は綺麗な青だし、背も高いけれど……色々物足りないわ。

「夫人は……イルーゼ様はまだ若く初心でいらつしやるからそう思われるのですよ。ほら、ご覧ください。侯爵もご夫人方に囲まれてまんざらでもないご様子」

名を呼ばれてますます不快になったけれど、彼の視線を辿るとその先には夫人たちに囲まれた

ヴォルフ様がいらつしやった。一番距離が近いのは……ドウルム伯爵家の若夫人だわ。あの方、まだ諦めていなかったのね。不快な感情が一層深まった。

「侯爵も男盛り、違う刺激を求めるのは男の性ですよ。どうです？ その間は私たちと楽しく過ごしませんか？」

「左様ですか。そのような意見もあるということは心に留めておきますわ」

「では……」

私が肯定したと思ったのか瞳を輝かせたけれど、ぎらついた目が気持ち悪いわ。私の手を取ろうと手が伸びてきたので、扇を閉じてぴしやりと叩いた。

「カール！」

「軽々しく触れないでくださいまし」

「これは手厳しい」

エルマ様が窘めるように名を呼んだけれど、当人はニヤニヤしたままだった。私の拒絶を駆け引きだと思つたみたいね。そんな気はこれっぽっちもないのだけど。その時だった。離れた場所で騒めきが立った。

「誰の許可を得て俺に触れる？」

聞こえてきたのは咎めるようなヴォルフ様の声だった。それだけで何が起きたのか理解したわ。

「ま、まあ、ヴォルフ様。申し訳ありませんわ、お会い出来たのが嬉しくて……」

頬を染めて恥じらしいの表情を浮かべたドウルム若夫人だったけれど、さすがにそんな表情が武器

になるお年ではないでしょうに。愛人が何人もいるのは有名だし。

「俺に触れていいのも、名を呼んでいいのも妻だけだ」

その一言が耳に届いて頬と耳に熱を感じた。ヴォルフ様……その台詞は反則です……

「ま、まあ……ヴォ、侯爵様は愛妻家でいらっしやるのね。ほほ、妬やけますわあ」

夫人が慌てて笑みを浮かべたけれど、その顔は引き攣ひきつっていた。周りの夫人たちも顔を悪くしている。ヴォルフ様はそんな夫人たちを一瞥もせず、無表情でこちらに向かってきた。一部の夫人たちがヴォルフ様の背を追ったけれど、その先に私がいると気付くと歩みを止めた。マイネ殿はにやついたまま固まっている。

「何故俺の妻に触れようとする？ 名前もだ。許したのか？」

「まさか、挨拶も受けていませんわ」

後半の台詞せりふは私に向けたものだったのできっぱりと否定すると、ヴォルフ様の表情が険しくなった気がした。それって……私を気にかけてくださった？ マイネ殿たちは何も答えられず顔を引き攣ひきつらせたまま立ち尽くしている。

「侯爵様、申し訳ありません」

彼らに代わって声を上げたのはエルマ様だった。

「家門の者の無礼、代わりに謝罪申し上げます」

エルマ様が一步前に出て頭を下げた。彼らを止められなかったことに責任を感じてしまわれたのね。こんな人たちが放っておけばいいのに、責任感が強いから。そんなところも好きだけど。

「当家からマイネ家に嚴重に抗議いたします。それで収めていただけませんか？」

「いいだろう」

鷹揚おうようにヴォルフ様が頷いた。エルマ様の顔を立ててくださったのね。

「エ、エルマ、お前まへっ、余計なことを……」

「いい加減にしる！」

「バ、バルドリック……」

エルマ様に庇われたのを不服に思ったのか、マイネ殿が声を上げようとしたのを叱りつけたのはバルドリック様だった。彼にしては珍しく険しい表情をしている。

「今すぐ退出しる。祝いの場で騒ぎを起こすとはどういう見だ？ 沙汰さたがあるまで家で謹慎していろ」

「お、お前にそんな命令をされ……」

「バルドリック様は侯爵家の令息。少なくともあなたより立場は上ですわ」

エルマ様がバルドリック様を援護した。その言葉にマイネ殿が顔を歪ゆがめる。

「不服か？ だったら俺から伯爵に抗議しよう」

「な……！！ そ、っ！ それは……！！」

「失せろ」

静かに放たれたヴォルフ様の言葉に、彼らは顔を青くしたまま去っていった。情けないわね、この程度で怯えるなんて。あれでは砂粒ほど心も動かないわ。

「侯爵様、申し訳ございませんでした」

「気にするな。騒ぎを起こす奴が悪い」

ヴォルフ様の言葉にざわついていた周りが静かになった。マイネ殿といいドウルム若夫人といい、結婚式で不倫の誘いなんて非常識すぎるわ。でも今日の発言はヴォルフ様が不貞を良しとしないと公言したも同然だから、愛人狙いの方々は大人しくなるかしら。

実際、この騒動でヴォルフ様は愛妻家だとの認識が社交界に広がっていった。あれは私との約束を守ってくださっているだけでそこに愛などないのだけど、それを誰かに話すことも出来ず、私は別の意味で頭を抱えることになった。



季節は夏から秋の終わりへと移り、社交シーズンを締めくくる豊潤祭がやってきた。我が国の社交シーズンは春に行われる新年を祝う舞踏会で始まり、秋の収穫を祝う豊潤祭で終わる。豊潤祭は豊かな実りに感謝を捧げる国の大切な行事で、国内は五日間お祭り騒ぎが続く。先王様の御代には餓死者が出た我が国も現陛下の治世の下、かつての豊かさを取り戻しつつあった。

その豊潤祭の最終日にあるのが王家主催の舞踏会。この日、私はヴォルフ様とフレディ様と共に王宮を訪れていたけれど、今回は入場順に異変が起きていた。

これまではランベルツ、アルトナー、ミュンター、ベルトラム、ゾルガーの順だったけれど、今回からはミュンター、アルトナー、ランベルツ、ベルトラム、ゾルガーの順になった。ミュンター侯爵家のアウグスト翁が起こしたゾルガー先代当主の第二夫人とその子息の殺害事件、更にはアルトナー侯爵の実弟が起こした麻薬横領事件。これらの事件のせいで両家はその地位を大いに失墜させていた。

「ゾルガー侯爵ご夫妻およびご令息ご入場！」

王宮騎士と呼ばれ、ヴォルフ様のエスコートで会場に足を踏み入れた。フレディ様がその後ろに続く。貴族たちの視線が一斉に注がれる感覚にはまだまだ慣れそうにないわ。シャンデリアの眩しいほどの煌めきと着飾った貴族たちの華やかな衣装で、会場は色彩に溢れていた。一年の社交を締めくくる舞踏会は豪華絢爛の一言に尽きる。今年は目立った災害が起きず例年並みの収穫量を得られたこともあってか、会場は安堵と歓喜の表情に満ちていた。

「今年も我が国は豊かな実りを数多く得ることが出来た。諸君と民の尽力に感謝する！」

壇上からかけられる陛下の労いの言葉に、会場内はワツと歓声が上がった後、割れるほどの拍手で満たされた。この舞踏会は下位貴族や辺境を治める貴族も参加する盛大なもの。今年は欠席する家は殆どなかったと聞くわ。

陛下の開会宣言の後、王族のダンスが始まり、国王ご夫妻と王太子ご夫妻が華やかに舞い踊った。まだ小さいお二人の王子殿下は壇上の椅子に座って侍従たちと共にダンスを眺めている。婚約者が決まっていないから国内外問わずかなりの数の釣書が届いているけれど、陛下はまだ早いと仰っているとか。それが一層競争に拍車をかけていると噂されていた。

「行くぞ」

王族のダンスが終わった後は私たち五侯爵家の番。ヴォルフ様の妻として王宮の催しで踊るのは、陛下の即位十五周年を祝う夜会以来二度目ね。まだ慣れなくて戸惑いの方が強い。

今日の私は濃緑の生地にも金と黄緑色の糸で刺繍がされたドレス。デザインはいつもの太ももまで身体のラインに沿って膝下から広がるもので、いつの間にかゾルガー風という名が付き、このデザインを求める夫人が増えてきている。

ヴォルフ様も同じ色の正装をお召しで、精悍さが際立って惚れ惚れしてしまうのは毎度のこと。最近は愛妻家との噂が定着しているけれど、ヴォルフ様からは愛せないとはつきり言われている。一抹の寂しさは拭えないものの、大事にされているのは感じているからそれで十分だわ。

「皆がお前の真似をしているな」

ヴォルフ様が身体を近付けてそう囁いた。相変わらず無表情だけど、今はそれを怖いとは思わない。それに注意深く見ていると時々感情の動きを感じることがあるわ。今はそれを見つづけるのが秘かな楽しみだったりする。

「なんだか変な感じですよ」

「だが悪い気はしないだろう？」

「はい」

ヴォルフ様が仰った通り、私の使うものが話題になって知らない間に流行していた。くすぐったい気分だけど、子どもっぽいドレスが減っていくのは嬉しいわ。

この後、ダンスは公爵家へと移るからその場を離れた。

多くの方から挨拶を受けてようやく人波が途切れた頃、見知った顔を見つけた。

「エルマ様」

こちらに向かってくる二人に笑みが浮かんだ。エルマ様とバルドリック様だわ。濃青で私と同じデザインのドレスはすらりとしたエルマ様によく似合っているし、胸が目立たないから清楚に見えて羨ましいわ。バルドリック様は紺と黒の正装に金の髪が映えて凛々しく見える。

「侯爵様、イルーゼ様、ご機嫌よう」

「ご無沙汰しております、ゾルガー侯爵、イルーゼ夫人」

お二人の挨拶にヴォルフ様が軽く頷くだけなのはいつものこと。言葉を返すのは王族と五侯爵家の当主くらいかしら。それを知っているからお二人が気を悪くされることはない。

「エルマ様、素敵ですよ、そのドレス。発色が良くて艶やかですよわね」

「ふふ、ありがとうございます。この生地、シャイル織ですよ」

「まあ、シャイル織って、リーゼ様の？」

「ええ、結婚式で見ていると思う。そうしたらバルが……」

そう言うエルマ様は恥ずかしそうに目を伏せた。シャイル織はリーゼ様が結婚式のドレスに使って話題になった生地で中々手に入らないと聞く。バルドリック様はエルマ様の心を繋ぎ留めようと頑張っているのね。それはとてもいい傾向だわ。そして、少し羨ましい。

「ふふ、よかったですわね、エルマ様」

「ええ、リーゼ様には助けられてばかりですわ」

エルマ様が指しているのはあの閨ねむらのことを綴つづった本のことかしら。あれからエルマ様は無事に初夜を迎えていた。私はヴォルフ様に取り残られてまだ読んでいないけれど、役に立ったのよね。

「それにしても……リーゼ様が一番に身籠みこもられるなんて、驚きましたわ」

「ええ、私も。新しく事業を立ち上げると張り切っていらっしやいましたから」

エルマ様が困惑の混じった笑みを浮かべた。リーゼ様は夏の気配が感じられるようになる頃に婚式を挙げられて、二十日ほど前にお子が出来たと内々に知らせがあったのよね。まだ公おまへにするには早いけれど、今日は大事を取って欠席されていた。

「早くも悪阻つわりが始まっているそうですわ。何も出来ないと嘆いていらっしやいました」

「リーゼ様らしいわね」

「このシャイル織を早く軌道に乗せたかったようですわ」

豊穰祭の舞踏会は宣伝するには最高の機会よね。エルマ様のドレスもそのために融通ゆうずうしてくださったのでしょね。

「あら、あれは……」

エルマ様の視線を追うと、その先には一人竹むハリマン様の姿があった。

「アルビーナ様との婚約も流れたとか」

「仕方ありませんわ。ですが、次が決まらなくて難儀しているとか」

アルビーナ様と婚約したばかりだったハリマン様。彼に瑕疵かしがあったわけじゃないけれど、三度

も婚約が白紙になると厳しいでしょうね。

「イルーゼ様への仕打ちが批判されるようになったこともありますわ」

「ふふ、私がゾルガー侯爵夫人になりましたから」

以前は姉とハリマン様の関係が真実の愛だと持てはやされていたけれど、私の地位が上がったせいでは不貞だったとの認識が広がっている。お陰で一層肩身が狭いでしょうね。でも自業自得だから気の毒とは思わないわ。暫く話した後、お二人と別れた。

「あの二人は上手くいっているようだな」

「ええ、これもヴォルフ様のお陰ですわ。ありがとうございます」

「大したことはしていない」

ヴォルフ様は素っ気なくそう仰おっしゃったけれど、ヴォルフ様がエルマ様に考える時間を与えてくださったお陰よ。その時間がなかったらエルマ様は修道院に駆け込むか、家に戻っても表面的な笑みしか浮かべなくなっていたでしょうから。感情がないと仰おっしゃるけれど人のことをよく見ていらっしやる。きつと根は優しい人なのよ。

「これはゾルガー侯爵、久しいですな」

「侯爵様、ご無沙汰ぶさたしておりますわ」

ダンスを眺める私たちに声をかけてきたのは一組の夫婦だった。男性は亜麻色の髪に恰幅のいい体形で、黄色味の強い茶の瞳は何を考えているのかわからないわね。女性は艶つややかな栗毛を緩く巻き、ゆったりとした笑みを浮かべているけれど、つり目なせいか気が強そうに見える。テイオの説

明にも名前が上がった人物の登場にすつと気が引き締まった。

「ザイデルか」

珍しくヴォルフ様が言葉を返した。王家か五侯爵相手にしかしないそれをするのには理由がある。夫人はヴォルフ様の異母兄ゲオルグ様の最初の妻で、媚薬を盛って閨を強行し、出奔の一因になった方。加害者でもあり被害者でもあるため少々扱いが面倒なのよね。ヴォルフ様は過去のことだと気にも留めていないけれど。

「おお、これが社交界で話題の夫人でいらつしやるか。確かに美しい」

「ありがとうございます」

社交辞令だとわかっていても礼を言うのもまた礼儀。夫人は変わらず笑顔だけれど、値踏みするような視線は隠せていない。

「お若くていらつしやいますな。いやはや、誘惑も多いでしょう。侯爵も心配が尽きませんな」

それは私が浮気すると言いたいのかしら？ 悪意を感じるのは私だけ？

「そんな心配は無用だ」

「左様ですか。ですが奥方は奔放だとの噂もありましたぞ」

「あの根も葉もない噂か」

ヴォルフ様が興味なさそうに答えた。

「噂ですか？」

「ああ。夫なら噂が本当かどうかわかるものだ。違うか？」

ヴォルフ様、なんてことを仰るのよ！ そう思ったけれど顔には出さず笑みを維持した。

「侯爵がそう仰るなら事実なのでしょうな。では……侯爵に隠し子がいるという噂は？」

その言葉に顔の筋肉が引き攣ったわ。隠し子って……

「そのような者はいない。種の管理に抜かりはない」

私の疑問をヴォルフ様が即座に否定したけれど、種って……そんな言い方……

「左様ですか。それは安心しました。筆頭侯爵が隠し子を放置したままでは示しがつきませんからな」

そう言う用語は済んだとばかりに離れていったけれど……どうということ？ 隠し子って……とんだ置き土産だわ。

「ヴォルフ様、今の話は……」

「根拠のない噂だ。不要な争いを起こさないためにも種の管理は厳重にしている」

「そ、そうですか……」

言い切られてはそれ以上聞けないわ。ここは人目も多いし、誰かに聞かれるかもしれない。ヴォルフ様は経験が豊富そうだけど、これだけはつきり言い切るといことはそんな事実はなかったのよね？

「おやおや、疑われましたね」

ザイデル伯爵の後ろ姿を見送る私たちに声をかけてきたのはアルトナー侯爵だった。夫人も一緒ね。五侯爵家の当主ではヴォルフ様と一番年が近いせいか気さくに声をかけてくる。クラウス様の

件ではかなりお心を痛められたようね、少し痩せられたわ。

「いつものことだ」

「まあね、妻一筋の私にだってその手の話がいくつも上がるくらいだから」

アルトナー侯爵は愛妻家で有名なのに、それでも隠し子の話は上がってくるのね。

「君も愛妻家だつて言われるようになったからね。これから誘惑が増えるよ」

「愛妻家なのにか？」

「君の場合、人間らしい心を取り戻したって人気が上がっているんだよ。最近声をかけられることが増えただろう？」

「くだらん」

ヴォルフ様は一蹴したけれど、確かにご夫人たちに囲まれることも、屋敷に届けられる招待状の数も増えたわ。ヴォルフ様が私以外の女性には触れないと公言していても、我こそはと挑んでくる夫人が後を絶たないのよね。

「子は元気か？」

「ああ、よく泣きよく笑う元気な子だ。娘も可愛がつているよ」

侯爵が一瞬目を丸くした後、笑顔で答え、その隣では夫人が表情を和らげた。尋ねてくれたのは私のため？ お二人の様子から姉が生んだ男児は可愛がられていることが窺えた。どうなるかと心配だったけれど、子に興味を示さなかった姉が育てるよりもよかったのよね。

「子どもは可愛いよ。君のところにも早く来てくれるといいね」

「そうだな」

ヴォルフ様はそう答えられたけれど、それこそが私の今一番の悩みだった。婚姻してからそれなりの時間が経つけれど、未だにその兆候がないから……

アルトナー侯爵夫妻と別れて会場内を見回すと、先ほど話しかけてきたザイデル伯爵夫妻が談笑している姿が見えた。一緒にいるのはランベルツ侯爵と弟のギュンター様だわ。ギュンター様が婿入りしたノイラト侯爵家は、ミュンター家に代わる五侯爵家への格上げの候補として名が上がった家の一つ。嫌だわ、ヴォルフ様の愛人の座を狙っているドウルム伯爵家の若夫人たちも一緒にいる。あの輪には近付きたくないわ。

「叔父上」

フレディ様が声をかけてきたわ。その後ろに令嬢たちが見えた。逃げてきたのね。

「ふふ、フレディ様、人気ですわね」

「笑い事じゃないよ、イルーゼ嬢」

眉間に深く皺を刻んで不機嫌さを露わにした。こんな表情をするなんて珍しいけれど、それだけ追い回されたのね。

「ブレッケル公爵様はどうなさいましたの？」

「今日は婚約者と一緒なんだ」

そういえばグラーツ伯爵家のアマリーエ様と婚約したわね。今までは二人一緒にいたから女性に囲まれることはなかったけれど、これからは大変かもしれない。

「早くお相手を見つけないと苦労しますわよ」
「勘弁してくれ。積極的な女性は苦手なんだ」
そう言ってフレディ様が苦笑いした。そうはいつでも侯爵家の出で見目もよくて優秀だったら、女性は放っておかないわ。私とヴォルフ様の間に子が出来ないうちは彼が後継候補筆頭だし、最近
は男性的な方が人気だもの。



舞踏会から十日ほど後、ヴォルフ様は王宮からの呼び出しを受けてお出かけになった。残された私は気が晴れないためバルコニーに出てお茶を飲んでみたのだけど……明るい空も、庭を飾る色とりどりの花々も、鳥たちのさえずりも、私の心を晴らしてはくれなかった。

「どうして……子が出来ないのかしら……」

婚姻してからあと少しで一年。月のものに乱れはないし、医師からも問題ないと言われたのに、未だにその兆候は見られない。聞きも頻繁ひんぱんにしているからいつ来てもおかしくないのに……

「イルーゼ様だったら……お子は授かりものです。それに、婚姻して一年も経っておりませんわ。二年過ぎたならまだしも、まだその時ではございません。焦りすぎですわ」

「そう、よね」

ロツテが苦笑しながら慰なぐさめるようにそう言ってくれた。確かにその通りだけど、姉は早々にクラ

ウス様の子を妊娠したし、母の実家は多産系だと聞いたことがあるわ。だからすぐに子が出来る
と思っていたのに……後継を産むための婚姻である以上、それが出来ない私に価値なんてないわよ
ね……

ヴォルフ様は子が出来なくても離縁しないし、第二夫人を娶めとっても私を蔑あはろにはしないと仰おしつ
てくださったけれど、ヴォルフ様が他の女性に触れるなんて考えただけでも心臓こころが締めつけられた
ように痛む……好きになってはいけなかったのに、私の心は勝手に私を裏切っていた。いえ、好き
になったことに後悔なんかないわ、あんなに素敵な方だもの。他の誰かを好きになるよりもずっと
誇らしくすら思う。だからこそ私が産みたいのに……

「こんなところでため息をついても何も変わりませんわ。そんな暗いお顔ではエドゼル様に嫌
われてしまいますわよ」

「ええっ？ そんなの嫌よ」

「だったら気持ちを切り替えてください。さあ、お出かけの準備をいたしましよ」

ロツテが珍しくおどけたように明るい声を出した。私を案じて気分を上げようとしてくれたのね、
その気持ちが嬉しい。そうね、悪いことばかり考えていたらせっかくの幸運も逃げてしまいわ。今
日はお義姉様とお茶の約束をしている。実家の事業とカリナーが産んだ子の様子を見るために、定
期的に実家を訪れている。いつもよりも明るめの色のドレスで実家へと向かった。

「お義姉様、お久しぶりです！」

「イルーゼ様、お待ちしておりましたわ」

輝く笑顔で出迎えてくれたのはお義姉様。応接室に通されてお義姉様と向かい合ったけれど、王都に出てきてからは一層美しくなられたわ。

「エドゼルは元気？ 今日泣いていないのね」

来るたびに元気な泣き声を上げていたカーリーナの子はエドゼルと名付けられ、兄とお義姉様の子として育てられている。子ども好きなお義姉様は、父の不貞の子なのに慈しんでくださっているわ。

「ふふ、お待ちくださいな。お昼寝から目覚めたばかりなの」

そう告げるお義姉様は慈愛に満ちた母親の顔をしていた。エドゼルの近況を聞いていたら乳母と侍女がエドゼルを連れてきてくれた。

「最近首が据わったのよ」

「まあ、成長って速いのね」

「抱いてみる？ 首が据わったから前ほど怖くはないはずよ」

「そうですか？ でしたら是非」

加減を間違えたら壊れてしまいそうで抱くのも怖かったから、これまではお義姉様が抱いたエドゼルの手や足を触るだけだった。でも首も据わったし、お義姉様も乳母もいるから大丈夫よね。手慣れた様子でエドゼルを渡してくるお義姉様の姿は、今の私にはとても眩しく見えた。腕の中に収まったエドゼルは小さくて温かくて、まだふにやふにやだわ。本当に首が据わったの？

「こ、これいいのですか？」

「ふふつ、大丈夫よ。でもそうね、念のため頭は支えていた方がいいわね」

「こ、こうですか？」

「ええ、上出来よ」

その言葉に安堵する。見つめると不思議そうな目をこちらに向けてくるわ。

「……可愛い……」

頼りない軽さと無垢な瞳に庇護欲が湧いてくる。

「ふふつ、すぐに来てくれますわよ。イルーゼ様のお子はどんな子になるかしらね」

髪と瞳は色の濃い方が出ると聞くから黒髪と緑目かしら？ 赤子でも眉間に皺が……ないわよね？ ヴォルフ様だって赤子の時は可愛かったと思うし。

「そうですね。出来れば黒髪と緑、どちらかだけがいいですわ」

私は気にしないけれど、世間ではまだ悪逆王と同じ色には禁忌感が根強く残っている。

「そうですね、両方ではいらぬ苦労をするかもしれないわね。でも、ゾルガー家ならそんなことを言う者はいないでしょう」

「そうだといいのですけれど……あ、でも女の子だとちょっと心配かしら？」

「そうですね、女の子はさすがにね」

男の子なら睨みを利かせるのいいけれど、ヴォルフ様似の女の子……眉間に皺を作らないよう朗らかな性格に育てなきゃ。暫くするとエドゼルがぐずり始めてしまった。疲れたのかしら、一緒に遊ぶのはまだ先の話ね。可愛いわ、私も早く子が欲しい……

エドゼルが部屋に戻った後は事業の進み具合などを教えてもらった。お義姉様がまとめた資料に